スーパー銭湯勃興史：傍流から主流へ

37-226089　金澤 弘志朗

0. 序：勃興するスーパー銭湯

0.1 研究の背景と目的

日本の銭湯の数は 1964 年頃をピークに減少の一途を辿っている。一方でスーパー銭湯・健康ランドなどを含む「その他の公衆浴場」は 1990 年代半ばには銭湯と数が逆転し、現在公衆浴場の中で多数派を占めている（図 1）。これまでは、日常生活の一部として庶民の衛生を支えてきた銭湯こそ日本の公衆浴場の主流と見られてきた。他方、スーパー銭湯や健康ランド、ヘルスセンターなど中大規模の複合型温浴施設は新興の、いわば公衆浴場史の傍流と見なされがちである。それに対して本論文は、20 世紀終わりに登場したスーパー銭湯の建築的な定義を定めるとともに、その定義に基づき公衆浴場の歴史を再考することにより、現代までの公衆浴場史においてスーパー銭湯が主流であったことを明らかにする。

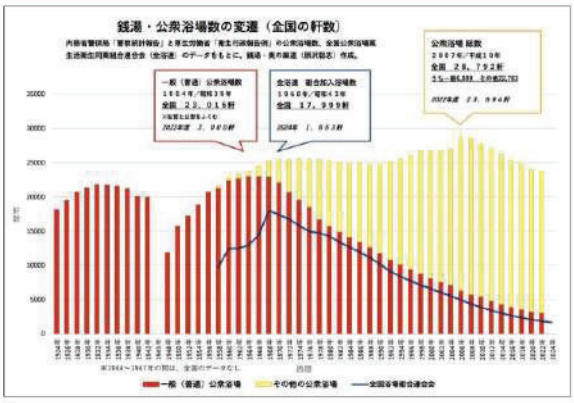

図 1：公衆浴場数推移

0.2 研究の対象

スーパー銭湯の建築的特徴を検討するにあたり、戦後に登場したヘルスセンター、健康ランド、スーパー銭湯等と呼ばれているものを分析対象とする。特にスーパー銭湯・健康ランドのうち現存するものについては「スーパー銭湯全国検索サイト[1]」に掲載されている 2296 件のうち、各都道府県の物価統制令で指定されている入浴料金以下のもの、未開店のものを除いた 1913 件を対象とする（2024 年 11 月時点）。他方、スーパー銭湯の歴史的考察については、国内外の既往の公衆浴場史が扱う浴場に加え、従来の公衆浴場史で十分に扱われてこなかった明治から戦前の日本に出現した遊園地等に付随していた公衆浴場、海水温浴場にとりわけ着目する。

0.3 研究の方法

既往研究、当時の雑誌や書籍などの史料・文献調査、各浴場が運営する HP などのインターネット情報の精査を中心に一部事例についての実地調査、メールでの質問などを通して得られた情報を用いて複合型温浴施設の全体像について明らかにする。

0.4 用語の定義

銭湯：公衆浴場のうち物価統制令の制限を受けるもの。公衆浴場法における「普通公衆浴場」または「一般公衆浴場」。

スーパー銭湯：従来は 1989 年に愛知県名古屋市にできた竜泉寺の湯で初めて用いられた呼称であり、1989 年以降にできた日帰り入浴を中心とした複合温浴施設を指していたが、本論文ではその空間的な意味を分析した上で、日帰りを主とした公衆浴場のうち、入浴以外の食事・休憩などの付帯設備を備えた複合型温浴施設全般を指すものと再定義する。なお、便宜上健康ランド、ヘルスセンターといった呼称を用いることもあるがスーパー銭湯に含まれるものとして扱う。

0.5 既往研究と位置付け

銭湯の研究に関しては中野の『入浴・銭湯の歴史』が古代から現代に至るまでの日本の入浴文化について書いている[2]。また、川端（2016）の近代欧米の公衆浴場運動が日本に及ぼした影響[3]、西島（2010）の平面形態に関する研究[4] など建築から文化的研究まで幅広く存在する。スーパー銭湯に関しては岡坂（2009）の癒しの空間の分析[5]や横溝（1965）のヘルスセンターの経営実態などがみられる[6]。また橋爪（1990）[7]や安野（2000）は戦前の娯楽施設の一部としての浴場にも言及しているが[8]、都市スケールの分析や遊園地の形成過程の一部として扱っているにすぎない。以上より公衆浴場史において複合型温浴施設を通史的に扱った研究は見られない。

0.6 論文の構成

１章ではこれまで複合型温浴施設の中でスーパー銭湯、健康ランド、ヘルスセンターといった名称がどのように区別されていたのかを明らかにする。２章では銭湯とスーパー銭湯の空間的違いからスーパー銭湯の建築的特徴を明らかにし、戦後から現代の「その他の公衆浴場」について分析する。３章ではユーラシア大陸西方及び日本の公衆浴場史について２章の定義から公衆浴場史を捉え直し、スーパー銭湯的要素を持つ公衆浴場がむしろ主流であることを示す。４章では複合型温浴施設にとって空白の 70 年となっていた戦前にも遊園地等に付随する形でスーパー銭湯が存在していたことを明らかにする。

1. 名称論争

本章では様々な名称が存在する複合型温浴施設についてヘルスセンター、健康ランド、スーパー銭湯がこれまでどのように区別されていたのかを明らかにする。

1.1 公衆浴場

複合型温浴施設の中心であるヘルスセンター、健康ランド、スーパー銭湯などは公衆浴場法における「その他の公衆浴場」に位置付けられる。銭湯と「その他の公衆浴場」に関しては、公衆浴場法と物価統制令において入浴料金の制限を受けるか否かで明確に区別されている。銭湯は入浴料金の上限が決められている代わりに税制上の優遇や水道料金、燃料費や各店舗での距離制限によって国や各都道府県の保護を受けることができる。それに対してスーパー銭湯をはじめとする「その他の公衆浴場」はこれらの制限、あるいは優遇措置を受けず自由競争となるため付帯設備や浴槽数で差別化を図り、結果として様々な形態と呼び名が生まれた。

指導教員　林 憲吾 準教授

1.2 その他の公衆浴場

「その他の公衆浴場」の中でも日帰り入浴を主体とする施設としてヘルスセンター、健康ランド、スーパー銭湯などが存在する。これまで、船橋ヘルスセンターをはじめとした、入浴以外にもプールなど娯楽施設が付属している最も大規模なものをヘルスセンターと呼んでいた。また 1980 年頃に登場した、日帰り入浴に加えて小規模な娯楽施設や食事処が付属したものでヘルスセンターより規模が小さなものを健康ランド、それより更に小規模で 1989 年頃に登場した癒しを目的としたものをスーパー銭湯と呼んでいたが明確な定義があったわけではない。近年になってスーパー銭湯はより設備を充実させミニ健康ランド化が進んでいる。そのためより一層のボーダーレス化が起きており、2024 年現在区別はより困難になっている[9]。

1.3 小結：混在する名称

銭湯に対して資金的制約が少ないヘルスセンターなどは様々な設備で集客を図り、規模によって複数の名称が存在したが明確な分類はされていなかった。さらに現代において、ボーダーレス化が進み、区別はより難しくなったためほとんど境界がなくなってしまったことを明らかにした。では、このようにボーダーレス化が進む「その他の公衆浴場」に対して、そもそも銭湯との根本的な違いはどのような設備の差にあるのだろうか。次章でそれを分析する。

2. 空間としてのスーパー銭湯

本章では、スーパー銭湯の空間的特徴を銭湯との比較などから明らかにし、銭湯と異なる特徴を持つスーパー銭湯、健康ランド、ヘルスセンターを広義のスーパー銭湯として再定義する。

2.1 PARADISE 三田：スーパー銭湯と癒し

東京都港区にある「PARADISE 三田」（図２）は 1931 年に銭湯「万才湯」として創業し、2016 年まで営業していた。その後、リニューアルを経て 2022 年まで居酒屋として利用されていたが、コロナ禍の煽りを受けて閉店し、再び改装されて 2022 年にサウナを主体としたスーパー銭湯としてオープンした[10]。すなわち、同一の建物が銭湯からスーパー銭湯に変化した事例である。

図 2：PARADISE 三田の外観

そこで銭湯時代とスーパー銭湯時代の空間構成を比較するために実地調査を行った。万才湯時代の平面構成は典型的な銭湯であり、受付を経て男女の脱衣室、洗い場、浴室を備え、奥の壁に面して浴槽が配置されている。浴室の奥には機械室がある。居酒屋に改装する際に、男女の境の壁を取り払い、浴室に２階のスペースが付与された。スーパー銭湯に改装される際には男女の脱衣室として利用されていた空間に新たに休憩室が付け加えられ、機械室があった部分にサウナが付けられた。また２階部分には予約制の個室サウナも設置されている（図３）。普段は男性専用、毎月指定された日を女性専用として営業している。改装時に張り替えられたもののタイル張りの内装を維持している。ペンキ絵は見られないが、代わりに若手のアーティストとコラボして映像を壁面に映し出し、浴客を楽しませている。銭湯の文化を発展的に継承しつつも付帯設備としての休憩室が付与されたことがわかった。したがって、脱衣室、洗い場、浴室を基本とする銭湯に対して、スーパー銭湯はそれ以外の空間、とりわけ休憩室の存在を重視していると考えられる。

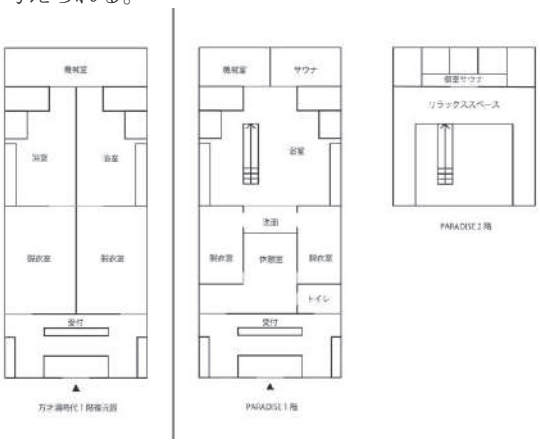

図 3：万才湯、PARADISE 平面配置

2.2 付帯設備と浴槽数

「スーパー銭湯全国検索」サイトに記載されているスーパー銭湯のうち全件数に対する各都道府県の件数の割合に応じて各県最低１つ以上入るようにして料金の高い順に 100 件を選定した。なお宿泊施設の大浴場を日帰りでも開放しているものは除いた。法律上の銭湯と「その他の公衆浴場」の違いは物価統制令の制限を受けるか否かであるため、料金の高いものによりスーパー銭湯の空間的特徴が顕著に反映されていると考えたため料金順に選定した。この 100 件に対して付帯設備、浴槽数の観点から統計を取った。付帯設備に関しては「休憩」「食事」「マッサージ」「書籍閲覧」「洗濯」「宿泊」「娯楽」に分けてカウントした。なお、カラオケやゲームコーナーに加えてプールやフィットネスも娯楽に含めた。その結果「休憩」が最も多く 100 件中 98 件あり、残りの２件はリゾートの敷地内にある場合など周辺施設で休憩可能であった。それに次いで「食事」が多かった。

浴槽数は最も少ないのは 1 個で最も多いものは 21 個であり、中央値は 8、平均値は 8.34 であった。

2.3 スーパー銭湯の平面的分析

前節で選定した 100 件のスーパー銭湯のうち各スーパー銭湯のホームページから浴槽の配置がフロアマップ等から判明した 43 件を対象として平面配置の分析を行った。

従来の銭湯の平面は関東式と関西式に分けられる（図４）。一方スーパー銭湯はまず浴槽数が増えるため、奥に浴槽を配置する関東式と中央に浴槽を配置する関西式が合流し、浴槽が配置される。これにより平面が拡大する。露天風呂は室内浴室の更に奥に配置されるのが一般的である。浴槽の配置に関してはサウナの配置によって入り口付近に配置されるパターン、奥に配置されるパターン、そのそれぞれに対して男女の境壁に接して配置されるパターン、そして両端に配置されるパターンの４つがあり、それらは敷地の形状と浴槽の数等に左右される。また、建物全

体の構成として銭湯の「受付」「脱衣室・浴室」という構成に「休憩室や商業施設」、場合によってはカラオケやジム、プールなど娯楽設備が付属する。基本構成として「受付」「休憩・商業施設」「脱衣・浴室」のそれぞれが同じ階層に配置されている場合と階層ごとに配置されている場合があり、階層の分け方でも類型が見られた。これがスーパー銭湯の基本構成といえる。

2.4 ヘルスセンターはスーパー銭湯か

1966 年版の『観光施設便覧』に記載されているヘルスセンターの一覧のうち付帯設備が判別できるものをみると、その全てに浴場以外の設備がついている[11]。従って本章の定義でみるとヘルスセンターも空間的にはスーパー銭湯とみることができる。

2.5 小結：広義のスーパー銭湯

本章では銭湯とスーパー銭湯の空間的な違いに着目し、同じ建物で銭湯からスーパー銭湯になった「PARADISE 三田」の実地調査とスーパー銭湯 100 件の空間分析を行なった。その結果付帯設備の有無、とりわけ休憩や食事のための空間がスーパー銭湯の空間的特徴であることを明らかにした。

これまで、銭湯とスーパー銭湯を別つものは入浴料金であった。しかし、本章ではその空間的特徴から相違点を明らかにした。この特徴を元に分類すると、「その他の公衆浴場」内で区別が曖昧であったヘルスセンター、健康ランド、スーパー銭湯について、広義のスーパー銭湯として一つに括ることができる。

3. 付帯設備から捉え直す世界公衆浴場史

では、このような広義のスーパー銭湯は 20 世紀後半の産物と見なして良いのだろうか。本章では古代にはじまる世界の公衆浴場を銭湯かスーパー銭湯かという視点で捉え直す。そして、身体を綺麗にすることが主だと思われている公衆浴場に、多くの場合、衛生と関係のない付帯設備が付属しており、スーパー銭湯のようなものが多くを占めていたことを明らかにする。

3.1 西方ユーラシア：公衆浴場 4000 年

世界でも最初期の公衆浴場は紀元前３世紀頃のモヘンジョ・ダロの沐浴場といわれている。単なる衛生施設ではなく宗教的意味合いを持って利用されていたと考えられているが定かではない。時が進み古代ギリシャの時代にはギムナシオン（運動場）が施設の中心であり、浴場はその付属としてシャワー式のものがあったに過ぎない。また、バラネイオンという公衆浴場も存在していた。こちらは規模によっては商業施設が付属しており、広義のスーパー銭湯と言える。古代ローマの時代になるとテルマエと呼ばれる大規模公衆浴場に運動場や図書館が付設し、飲食店やマッサージなどの店も軒を連ねていたという。西ローマ帝国の崩壊と共に浴場文化はイスラム勢力に引き継がれる。「清潔は信仰の半分」ともいわれるイスラム教の下、日常の一部としてハンマームという公衆浴場が利用された。ハンマームの多くは都市の中の１施設として存在しており建物自体は付帯設備を持っていなかったが、１日５回の礼拝の前に身を清めるなど清潔を重視するイスラム教において、宗教的な意味合いを内包して利用されていた。1820 年代になるとイギリスから公衆浴場運動が始まり、都市過密による疫病対策として公衆浴場が建設されていき、各家庭にシャワーが普及するまで利用されていた。

以上のように純粋な衛生としての公衆浴場は近代西欧の公衆浴場が主で、それ以外の公衆浴場には付帯設備や衛生以外の意味が付与されていたことが多いことがわかる。

3.2 日本：公衆浴場 1500 年

日本の公衆浴場の歴史は 538 年の仏教伝来に遡る。当時は仏教の布教を兼ねて市民に入浴させる施浴が寺院で行われていた。鎌倉時代には音曲で集客した湯屋もあったという。また室町時代には食べ物や酒を楽しむ娯楽温浴も人気だった。鎌倉、室町の湯屋に関しては空間構成が不明なため付帯設備の有無は判別できないが、入浴以外のサービスはあったようである。江戸においては 1591 年に伊勢与一が銭瓶橋で始めた湯屋が始まりとされている。江戸の湯屋には湯女と呼ばれる従業員がおり、背中を流すなどして客をもてなした。しかし次第に風紀が乱れ、度重なる禁令の末廃止された。しかしその名残で金を払って茶や菓子を出す女性がおり、 湯屋の２階で接客していた。基本的に男性客限定ではあったが、金を払って湯屋の２階でくつろぐことができたという。これは２階風呂と呼ばれ付帯設備付きのスーパー銭湯と言える（図４）。その後明治になると 1877 年に鶴沢紋左衛門が温泉を参考にした、天井を高くし湯に浸かる改良風呂を発明し、近現代の銭湯に繋がっていく。 ２階風呂は明治 15 年頃までに姿を消してしまった。

図４：２階風呂

3.3 小結：衛生の近代

ユーラシア大陸の西方では宗教に結びつくかたちで公衆浴場が出現し、ギリシア、ローマと運動場や図書館などの様々なサービスを取り込んだ複合型温浴施設として発展した。日本でも宗教と結びつくかたちで出発し当初は寺院に設置されていたものが次第に街中に現れていった。 江戸時代には２階風呂のように付帯設備を持った銭湯も登場した。近代欧米の公衆浴場運動下でできた公衆浴場や明治期以降の日本の銭湯のような純粋に衛生を求めてつくられたものは近代になって発現したものが多く、歴史的には少数派とも言えよう。

4. スーパー銭湯史空白の 70 年

前章で確認したように近代に入って公衆浴場は衛生のための銭湯になる傾向にあるが、それでは戦後にスーパー銭湯が現れるまでスーパー銭湯は姿を消したのだろうか。本章では銭湯のみが語られていた戦前公衆浴場史において、付帯設備を持った広義のスーパー銭湯が存在していたのかを明らかにする。

4.1 海水浴から浴場へ

日本近代においてスーパー銭湯は決して途絶えたわけではなく、海水浴場の導入を通じて新たなスーパー銭湯が誕生した。 明治になり欧米の文化が流入すると明治５年にオランダの医師スロイスが海水浴場の設置を建策している[12]。1888 年には天保山遊園に海水温浴場ができ、

1906 年には浜寺公園に海水浴場及び臨海浴場が、更に1913 年には大阪に大浜潮湯が、1914 年には築港大潮湯ができる。大浜潮湯には浴場以外に喫茶店、余興場、食堂が敷設されていた。築港大潮湯もまた喫茶店、プール、ビリヤード場、卓球場、演芸場を併設し、一大娯楽施設として栄えた(図５)。海水浴は日本の温泉・風呂文化と混じることで娯楽施設としての温浴施設が出現し始める。

図５：築港大潮湯

4.2 浴場と遊園地

もう一つの重要な場は遊園地であった。1903 年にアメリカにオープンしたコニーアイランドの遊園地、ルナパークには夜でも電灯に照らされて海水浴ができる場所が併設されていた[13]。欧米では遊園地に併設されるのは海水浴までだったが、日本では欧米の事例を参照しつつも温浴場を伴った遊園地が登場した。大阪を中心に 1911 年に宝塚新温泉パラダイス、1912 年に新世界ルナパークの噴泉浴場（図６，７）など遊園地の一施設として大規模な浴場が建設された。こういった公衆浴場には休憩所やレストランが併設されており、風呂数は少ないものの現代のスーパー銭湯と本質的に同じものだといえる。

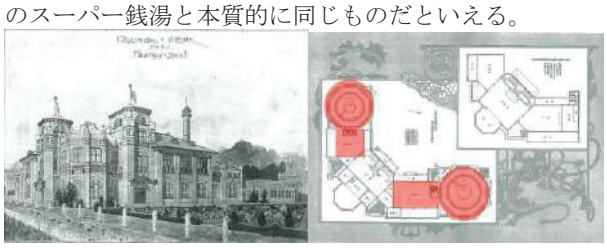

図 6, 7：噴泉浴場外観（左），平面図(右, 網掛け部分が脱衣室・浴室)

こうした遊園地は東京でも建設され、1925 年に多摩川原遊園京王閣（図８，９）や温泉遊園地多摩川園が建設された。京王閣は 3 階建てであり 1 階の脱衣室・浴室以外は付帯設備であり、割合にしてみると全延床の１割ほどであろう。温泉遊園地多摩川園は現在の東急が沿線の価値向上を目的に娯楽施設をつくり、鉄道会社の土地開発の一環として行った。

娯楽施設を併設した公衆浴場建設のアイデアは遊園地以外にもみられ、1925 年の『建築写真類聚』[14]にはレストラン、休憩所を含んだ公衆浴場案が記載されているが実現はされなかったようである。

しかし、遊園地の増加に伴い遊園地規則が整備されていったこと、遊戯機械の増加や遊園地の経営の悪化などが重なり、遊園地は遊戯機械の集合体となっていったことで娯楽温浴施設は姿を消していき、そして時代は第二次世界大戦へと向かっていった。

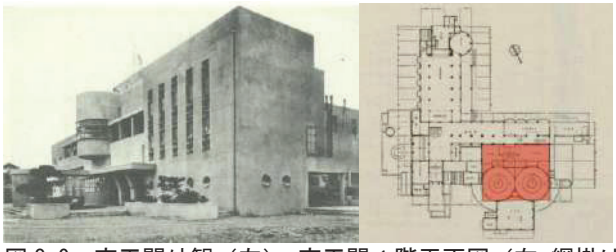

図 8, 9：京王閣外観（左），京王閣１階平面図（右, 網掛け部分が脱衣室・浴室）

4.3 小結：伝統的スーパー銭湯

これまで、日本におけるスーパー銭湯などの娯楽施設を伴った公衆浴場は戦後のヘルスセンターを出発点として語られてきた。しかし、本章では戦前にも娯楽温浴施設が存在していたことを明らかにした。

5. 結：傍流から主流へ

公衆浴場史のなかでスーパー銭湯のような娯楽温浴施設はほとんど触れられてこなかった。しかし、世界において公衆浴場は常に衛生以上の意味と役割を持って存在してきた。日本においても戦前から現代まで、公衆浴場史の主流とされてきた銭湯に影響を受けながら娯楽温浴施設が存在してきたことが明らかになった。これは衛生を主な目的とする銭湯が公衆浴場史の主流であるというこれまでの歴史観に対して、娯楽温浴施設であるスーパー銭湯こそが実は主流であった可能性を示唆している。今回、スーパー銭湯を通史的にみることで公衆浴場史を捉え直すことを試みた。しかし、銭湯に関しては調査することができなかった。物価統制令の制限を受ける「普通公衆浴場」にも脱衣・浴室以外の空間を持ったスーパー銭湯が存在している。また、逆に「その他公衆浴場」の中にも銭湯と呼ぶべきものは存在する。これらの調査は今後の課題とする。

＜図版出典＞

図 1: http://1010meguri.blog.fc2.com/blog-entry-404.html　図 2:筆者撮影　図 3：筆者作成　図 4：中野栄三.1984.『入浴・銭湯の歴史』.雄山閣　図 5：夕刊大阪新聞社（編）.1929.『大阪商工大観 昭和 4 年版』.夕刊大阪新聞社　図 6,7：橋爪紳也（監修・解説）.2012.「大阪新名所新世界・通天閣写真帖復刻版」.創元社（網掛け部分は筆者による）　図 8,9：高梨由太郎.1927.『多摩川原遊園京王閣図集』.洪洋社.（網掛け部分は筆者による）

＜注釈＞

[1] スーパー銭湯全国検索.『https://www.supersento.com/』参照 2024/11/22
[2] 中野栄三.1984.『入浴・銭湯の歴史』.雄山閣
[3] 川端美季.2016.『近代日本の公衆浴場運動』.法政大学出版局
[4] 西島慧子,山中新太郎.2010.「銭湯建築の平面形態に関する研究」.『日本建築学会大会学術講演梗概集(北陸)2010 年 9 月』.pp.375,376
[5] 岡坂憲,細竹優志,川戸敏雄.2009.「スーパー銭湯における癒しの空間に関する研究」『日本建築学会四国支部研究報告集 2009 年 5 月』.pp.101,102
[6] 横溝博.1965.「ヘルスセンター事業の実態分析とその企業計画の実例について」『入賞論文集：第 4-5 回観光研究論文募集』.pp.3-15
[7] 橋爪紳也.1990.「都市再編過程における娯楽施設整備の役割に関する研究」
[8] 安野彰.2000.「明治・大正・昭和初期の日本における遊園地の概念と実態-近代都市における娯楽施設の成立に関する研究-」
[9] 『http://www.kobayashi-k-k.jp/tsushin1.html』ほか.参照 2025/1/1
[10] PARADISE 三田公式サイト.『https://paradise-mita.com/』.参照 2025,1/1
[11] 1966.『観光施設便覧』.運輸省観光局監修,日本観光協会発行
[12] 落合茂.1973.『洗う文化史話』.花王石鹸株式会社
[13] レム・コールハース（著）,鈴木圭介（訳）.1999.『錯乱のニューヨーク』.ちくま学芸文庫
[14] 建築写真類聚刊行会（編）.1925.『建築写真類聚第 5 期第 3 回』.洪洋社

＜他主要参考文献＞

１： Vladimir Krizek（著）,種村季弘・高木万里子(訳) .1994.『世界温泉文化史』.国文社　２：Virginia Smith（著）,鈴木実佳（訳）.2010.『清潔の歴史』.東洋書林　３： Garrett G. Fagan.2002.『Bathing in Public in the Roman World 』.The University of Michigan Press　４：Sandra K. Lucore and Monika Trumper（編）.2013. 『GREEK BATHS AND BATHING CULTURE』.Peeters Pub & Booksellers　５：大場修（著）,山田幸一（監）.1986.『物語 ものの建築史 風呂のはなし.鹿島出版会　６：1972.『公衆浴場史』.全国公衆浴場業環境衛生同業組合連合会